中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第八回 秀吉の朝鮮出兵

VIDEO

「耳塚はいま」（鈴木ゼミ2014年度生制作）

南北朝時代と戦国時代に東アジア各地を襲った倭寇に続き、一五九二年から前後七年に及んだ豊臣秀吉の朝鮮出兵は、東アジアの人々に日本に対する負の記憶を刻み込む。

一方、朝鮮半島から日本へ連れ去られた被虜人（捕虜）を通じて、朱子学が伝えられると、江戸幕府はこれを武士の正学と定め、平和で秩序ある社会を再構築する。

また被虜人によって伝えられた製磁の技術は、日本に新たな産業を生み出していく。

目次

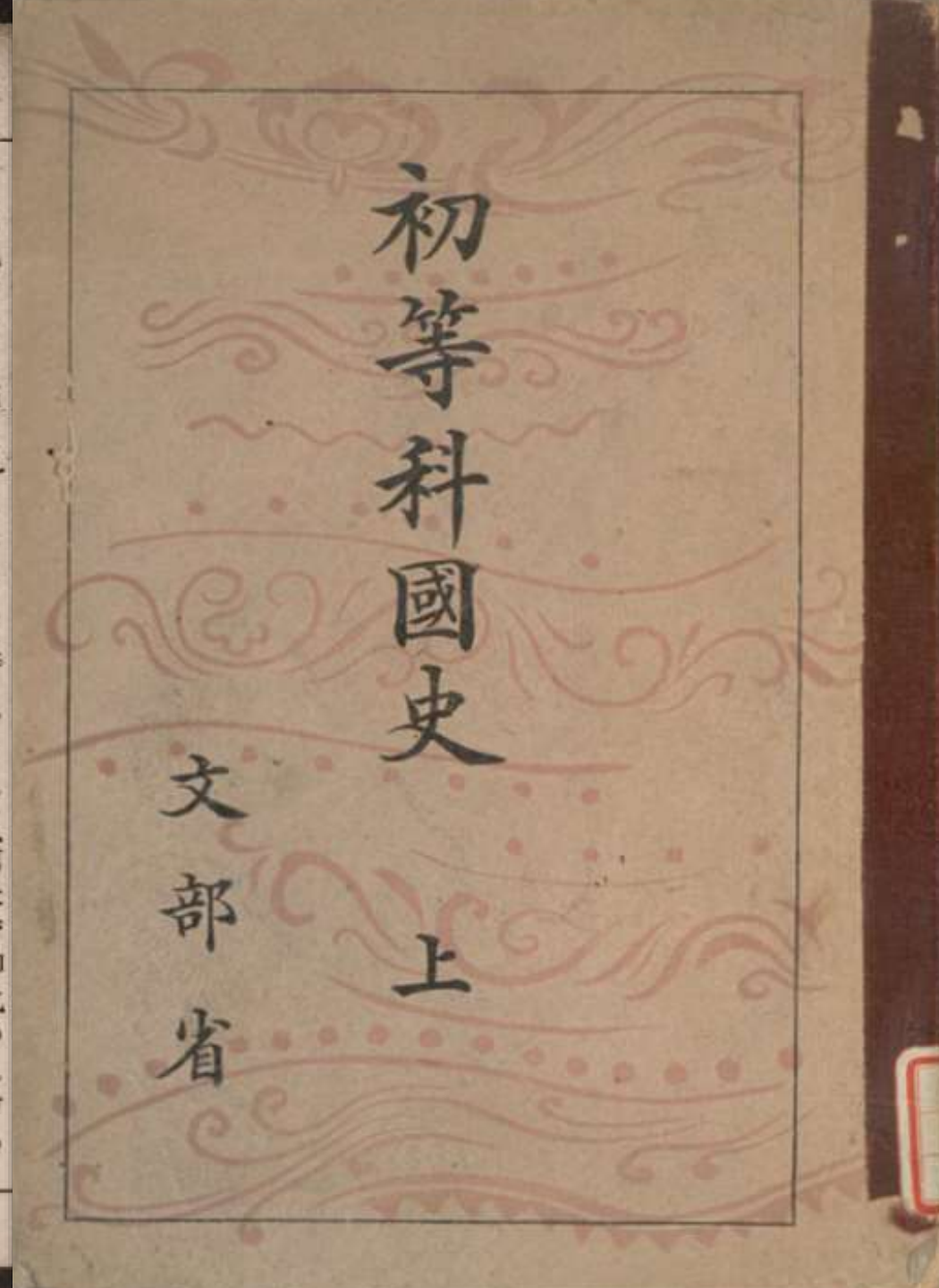
第一節　秀吉の朝鮮出兵
第二節　明代の文学に描かれた秀吉像
第三節　被虜人が伝えた文化

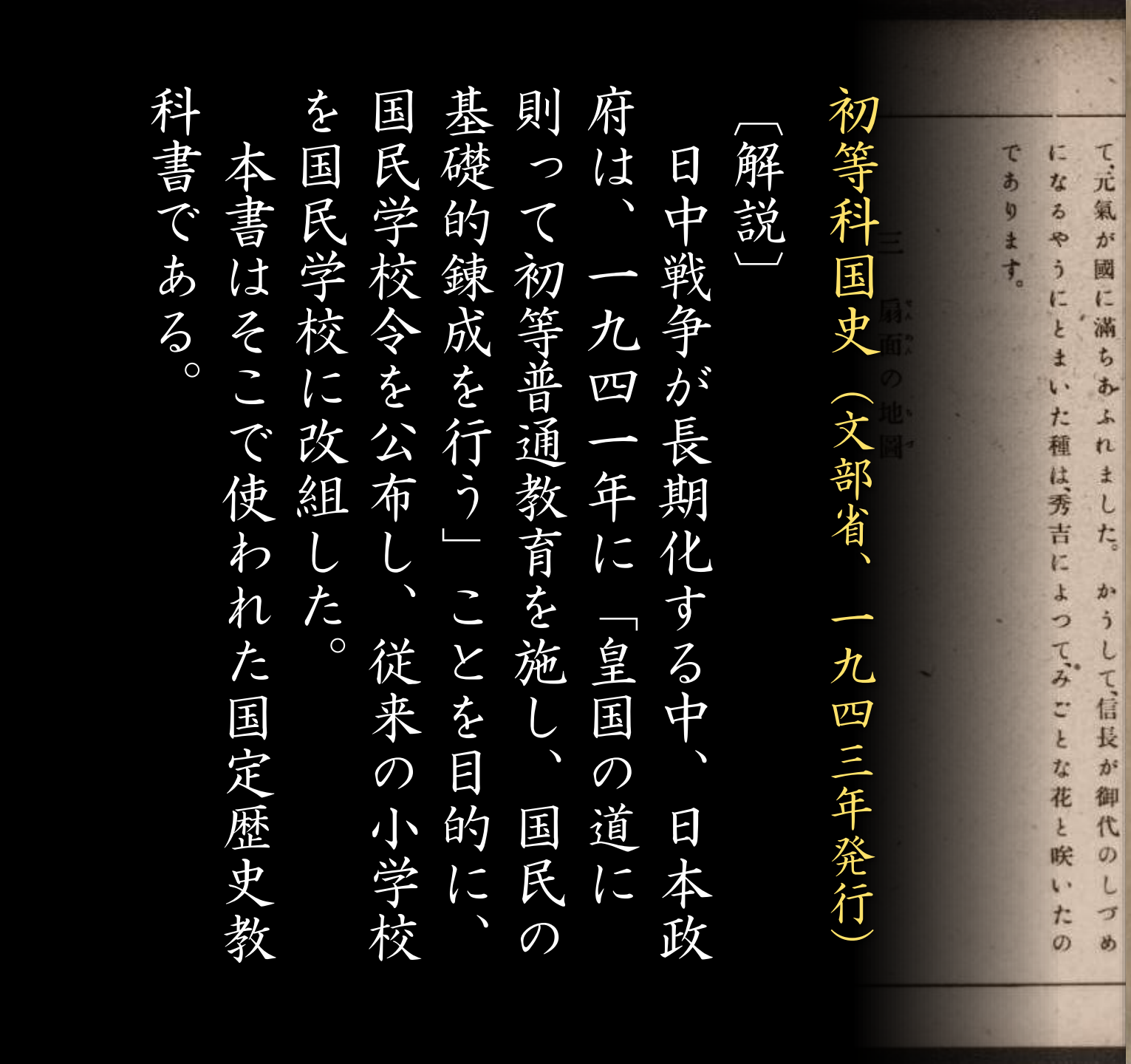
第一節　秀吉の朝鮮出兵

東アジアの歴史の中で、秀吉の朝鮮出兵ほど、その評価が顕著な対照を見せるものは少ない。

東アジアの人々の心に負の対日イメージを刻み込んだこの事件を、日本ではどのように評価してきたのであろうか。

ここでは、戦時下の国民学校初等科用教科書を見ながら、国民教育の中の「歴史」と史実との違いについて考えてみたい。





て、元氣が國に滿ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

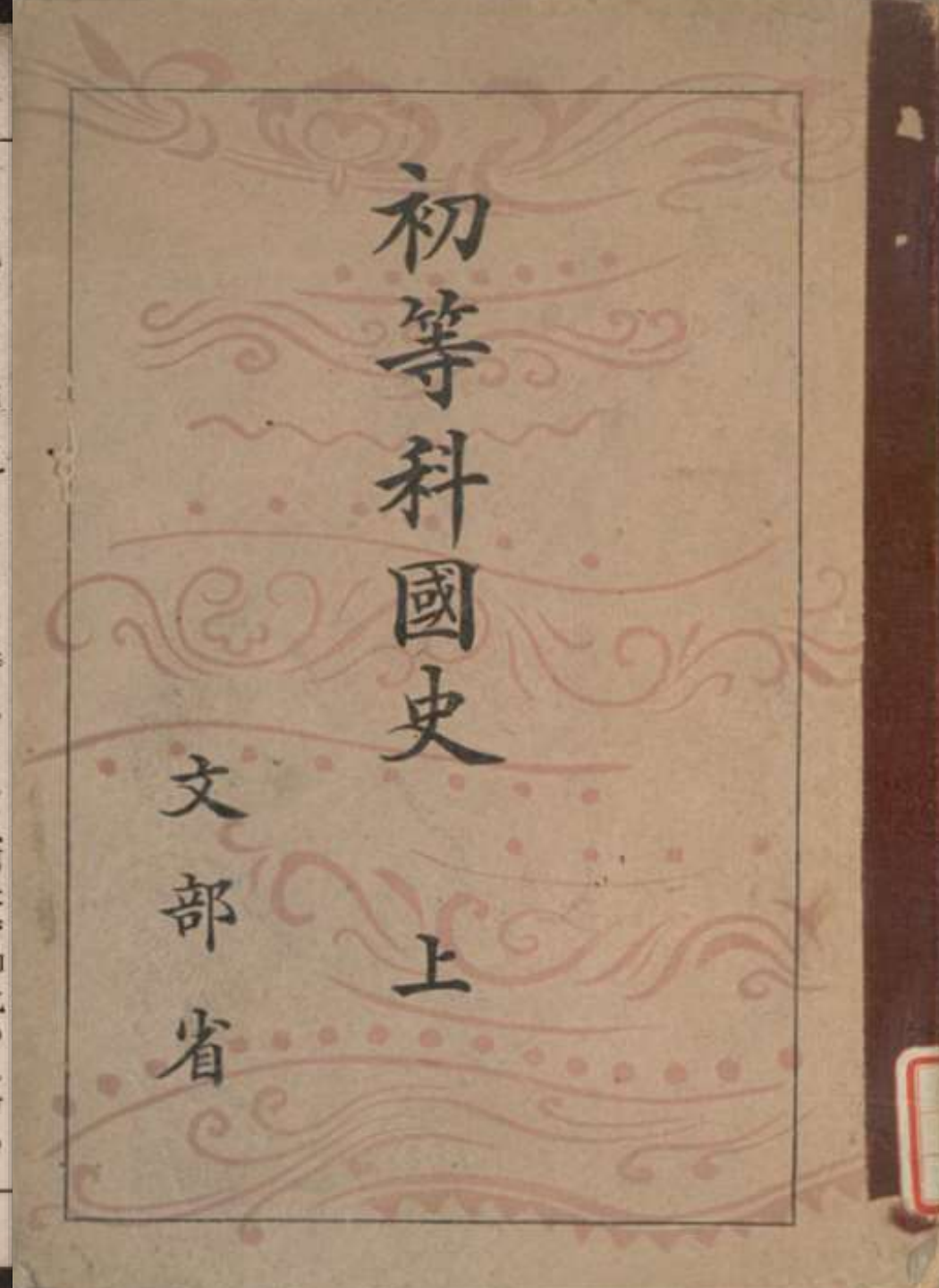
三　扇面の地圖

初等科国史（文部省、一九四三年発行）

〔解説〕

日中戦争が長期化する中、日本政府は、一九四一年に「皇国の道に則って初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成を行う」ことを目的に、国民学校令を公布し、従来の小学校を国民学校に改組した。

本書はそこで使われた国定歴史教科書である。



三 扇面の地圖

て、元氣が國に滿ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

初等科国史（文部省、一九四三年発行）

〔解説〕

豊臣秀吉は戦国の乱世に終止符を打ち、西欧のアジア進出に対抗するため大陸侵攻（「唐入り」）を計画する。ところが朝鮮半島の通過を拒否されたため、攻撃の矛先を朝鮮に代え、二度の出兵（文禄・慶長の役、韓国では壬辰・丁酉倭乱と呼ぶ）を行う。

戦時中の教科書はこの出兵をどのように描いていたのだろうか。

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亜を建設しようといふ、大きな望みでありました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

て、元氣が國に滿ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとな花と咲いたのであります。

三　扇面の地圖

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも從へて、日本を中心とする大東亜を建設しようといふ、大きな望みでありました。九州から歸る途中、對馬の宗氏に命じて、朝鮮に朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。

國内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようとしました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、關白を退いて大閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考へました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前の名護屋に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長・加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

国内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようとしました。……ところが朝鮮は、明の威勢をはばかって、わが申し入れに応じません。そこで秀吉は、関白を退いて太閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考えました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

て、元氣が國に滿ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は秀吉によつてみごとな花と咲いたのであります。

三　扇面の地圖

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも從へて、日本を中心とする大東亞を建設しようといふ、大きな望みでありました。

九州から歸る途中、對馬の宗氏に命じて、朝鮮に朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。

國内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようとしました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、關白を退いて大閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考へました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前の名護屋に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長・加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思

VIDEO

NHKE

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

釜山に上陸したわが軍は、連戦連勝、北進また北進して、たちまち京城をおとしいれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。……また、全軍よく軍紀を守って人民をあはれみ、武士の面目を示しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

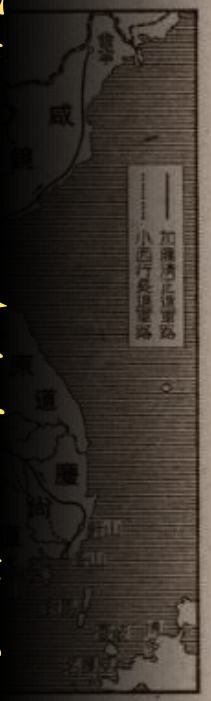
第八　御代のしづめ　十八

ひ思ひの旗を勇ましく潮風になびかせ、海をおほつて進みました。釜山に上陸したわが軍は、連戦連勝、北進また北進して、たちまち京城をおとしいれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。この間、清正はたびたびの戰に、槍のほまれ高く拔群のてがらをあらはし、また、全軍よく軍紀を守って、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

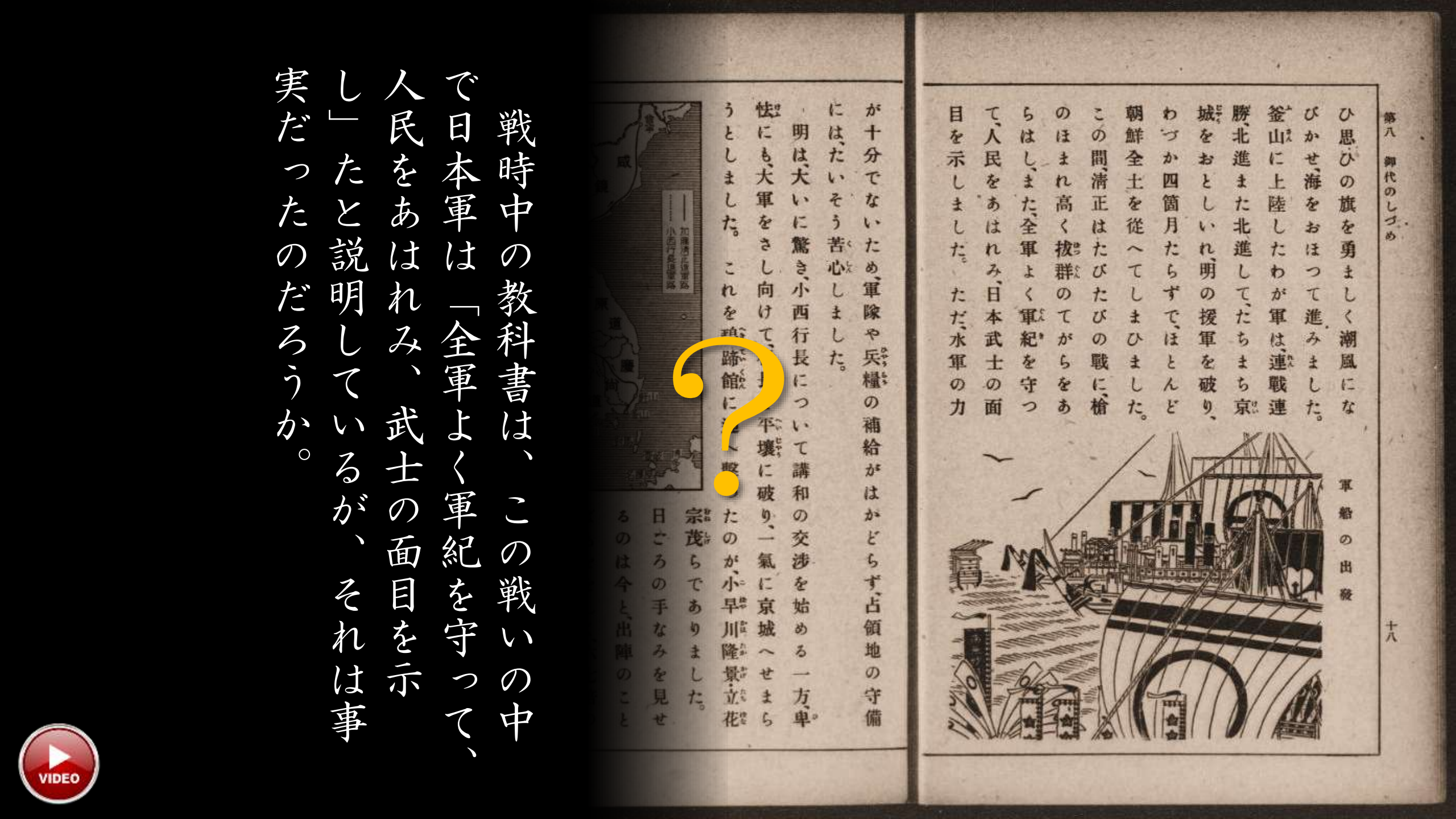
明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃ったのが、小早川隆景・立花宗茂らでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のこと

軍船の出發



戦時中の教科書は、この戦いの中で日本軍は「全軍よく軍紀を守って、人民をあはれみ、武士の面目を示し」たと説明しているが、それは事実だったのだろうか。



第八　御代のしづめ

ひ思ひの旗を勇ましく潮風になびかせ、海をおほつて進みました。釜山に上陸したわが軍は、連戰連勝、北進また北進して、たちまち京城をおとしいれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。この間、清正はたびたびの戰に、槍のほまれ高く拔群のてがらをあらはし、また、全軍よく軍紀を守つて、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、平壤に破り、一氣に京城へせまらうとしました。これを聽跡館に迎へ撃つたのが、小早川隆景・立花宗茂らでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のこと

軍船の出發

十八

ＮＨＫ ＥＴＶ特集「日本と朝鮮の２０００年 第８集」より

釜山鎮殉節図

日本武将が見た朝鮮出兵

〔解説〕

突如として日本の戦国武将に襲われた朝鮮半島では、男女を問わず多くの人々が殺害された。

秀吉の第一次朝鮮出兵（壬辰倭乱＝文禄の役）で小西行長率いる一番隊に属した松浦鎮信の部将・吉野甚五左衛門は、その惨状を従軍記*の中に記している。

*「吉野甚五左衛門覚書」（塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収）

日本武将が見た朝鮮出兵

皆手を合はせてひざまづき、聞きもならわぬ唐言、『まのら、まのら』といふことは、助けよとこそ聞こえけれ。

それをも味方聞きつけずきりすてうち捨て踏みころし、是を戦神の血祭と、女男も犬猫も、皆きり捨てて、きりくびは三万程ととぞ見へにける。

吉野甚五左衛門覚書
（塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収）

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

城をおとしいれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。

この間、清正はたびたびの戰に、槍のほまれ高く拔群のてがらをあらはし、また、全軍よく軍紀を守つて、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力

が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景・立花宗茂ちでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のことばもをしく、六七倍の明軍をさんざんに撃ち破つて、勇名をとどろかしたのであります。

日本軍は「占領地の守備にたいそう苦心」したというが、その本当の理由は何だったのだろうか？

城をおとしいれ、明の援軍を破り、わづか四箇月たらずで、ほとんど朝鮮全土を従へてしまひました。

この間、清正はたびたびの戰に、槍のほまれ高く拔群のてがらあらはし、また、全軍よく軍紀を守つて、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、快にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一氣に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景・立花宗茂ちでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のことばもをしく、六七倍の明軍をさんざんに撃ち破つて、勇名をとどろかしたのであります。

NHKE
ＮＨＫ ＥＴＶ特集「日本と朝鮮の２０００年 第８集」より

万暦帝(1563～1620)

豊臣秀吉(1536～98)

武力戰ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて來た國書の中には、「特に爾を封じて日本國王と爲す」といふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長・清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を從へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、泗川の戰で、數十倍の明軍を擊ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。

秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すつかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るもとになるのです。

戰時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

武力戰ではかなはないと見たか、明はふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

武力戰ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて來た國書の中には、「特に爾を封じて日本國王と爲す」といふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長・清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を從へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、泗川の戰で、數十倍の明軍を擊ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。

秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すつかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

ところが、明の使節の持って来た国書の中には、爾（なんぢ）を封じて日本国王と為すといふ、無礼きはまる文句がありました。

秀吉は大いに怒って、その使ひを追いかへし、再征の命令をくだしました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

万暦帝(1563～1620)

秀吉と明との間では、どのような
交渉が行われていたのだろうか？

豊臣秀吉(1536～98)

NHK ETV特集「日本と朝鮮の２０００年 第８集」より

戦時中の教科書に描かれた朝鮮出兵

そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によって、出征の諸将は、それぞれ兵をまとめて帰還しました。かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に国民の海外発展心は一だんと高まりました。また、わが軍の示したりっぱなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を与えました。

慶長二年、ふたたび行長・清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部を平定しました。その後、三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によって、出征の諸将は、それぞれ兵をまとめて帰還しました。この時、島津義弘は、泗川の戰で、數十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すつかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るもとになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことばが、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本・朝鮮・支那の三國をゑ

明との講和交渉が決裂すると、一五九七年、日本は再び朝鮮に出兵する。慶長の役（丁酉倭乱）である。

二度にわたる朝鮮出兵は、翌一五九八年、秀吉の死によって終結する。

教科書はこの戦いの中で日本軍が示した「りっぱなふるまひ」は「朝鮮の人々に深い感銘を与へ」たというが、それは事実だったのだろうか？

秀吉の扇

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機會に、國民の海外發展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつぱなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すつかり衰へてしまひました。これが、やがて滿洲から清が興るもとになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことばが、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本・朝鮮・支那の三國をゐ

の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を從へました。このころ、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳で亡くなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘は、泗川の戰で、數十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。

ＮＨＫ ＥＴＶ特集「日本と朝鮮の２０００年 第８集」より

第二節　明代の文学に描かれた秀吉像

姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

姜沆（一五六七―一六一八）、号は睡隠。一五九三年、科挙に合格し、朝鮮王朝の官僚となる。

一五九七年、秀吉の第二次朝鮮出兵（丁酉倭乱＝慶長の役）の際に捕虜となり、日本で三年近い抑留生活を送った後、一六〇〇年に帰国。

「看羊録」は、その間の見聞を綴ったもの記録である。

被虜人(拉致被害者)が見た耳塚

〔解説〕

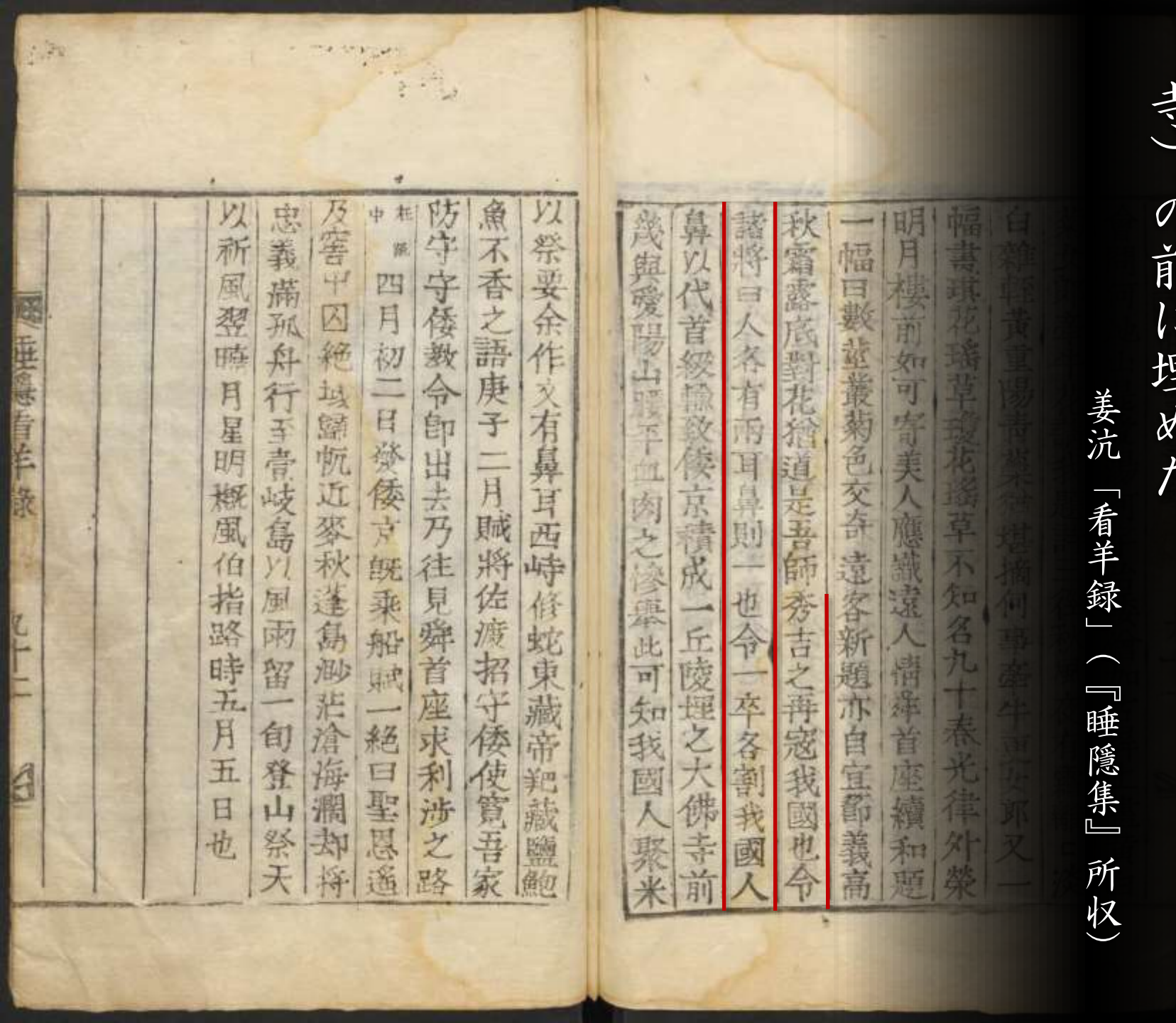
一五九八年、秀吉の死により、朝鮮出兵は終わった。翌一五九九年、日本に拉致された朝鮮の人々が、京都の耳塚で犠牲者を弔う法事を行うことになり、姜沆はその求めに応じて耳塚供養の追悼文を起草した。

＊写真は姜沆の詩文集『睡隱集』

被虜人(拉致被害者)が見た耳塚

秀吉がわが国を再び侵略した時、諸将に対して「人はそれぞれ二つの耳があるが鼻は一つである」と言って、すべての兵士にわが国の人の鼻をそいで首級に代え、倭京に送るよう命じた。それが積もって一つの丘のようになったので、大仏寺（方広寺）の前に埋めた。

姜沆「看羊録」（『睡隠集』所収）



白雉輕黃重陽青菜紅堪摘何事牽牛西去郎又一
幅書琪花瑤草致花瑤草不知名九十春光律外榮
明月樓前如可寄美人應識遠人情羈首座續和題
一幅曰數莖叢菊色交奇遠客新題亦自宜鄙義高
秋霜露底對花猶道是吾師秀吉之再寇我國也令
諸將曰人各有兩耳鼻則一也令一卒各割我國人
鼻以代首級輸致倭京積成一丘陵埋之大佛寺前
幾與愛陽山腰平血肉之慘畢此可知我國人聚米
以祭要余作文有鼻耳西峙修蛇東藏帝羆藏鹽鮑
魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家
防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路
（柱撫中）四月初二日發倭京既乘船賦一絶曰聖恩遥
及窘中囚絶域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將
忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天
以祈風翌曉月星明概風伯指路時五月五日也

方広寺
豊国神社
旧方広寺
（大仏寺）
跡地
耳塚

耳塚（鼻塚）

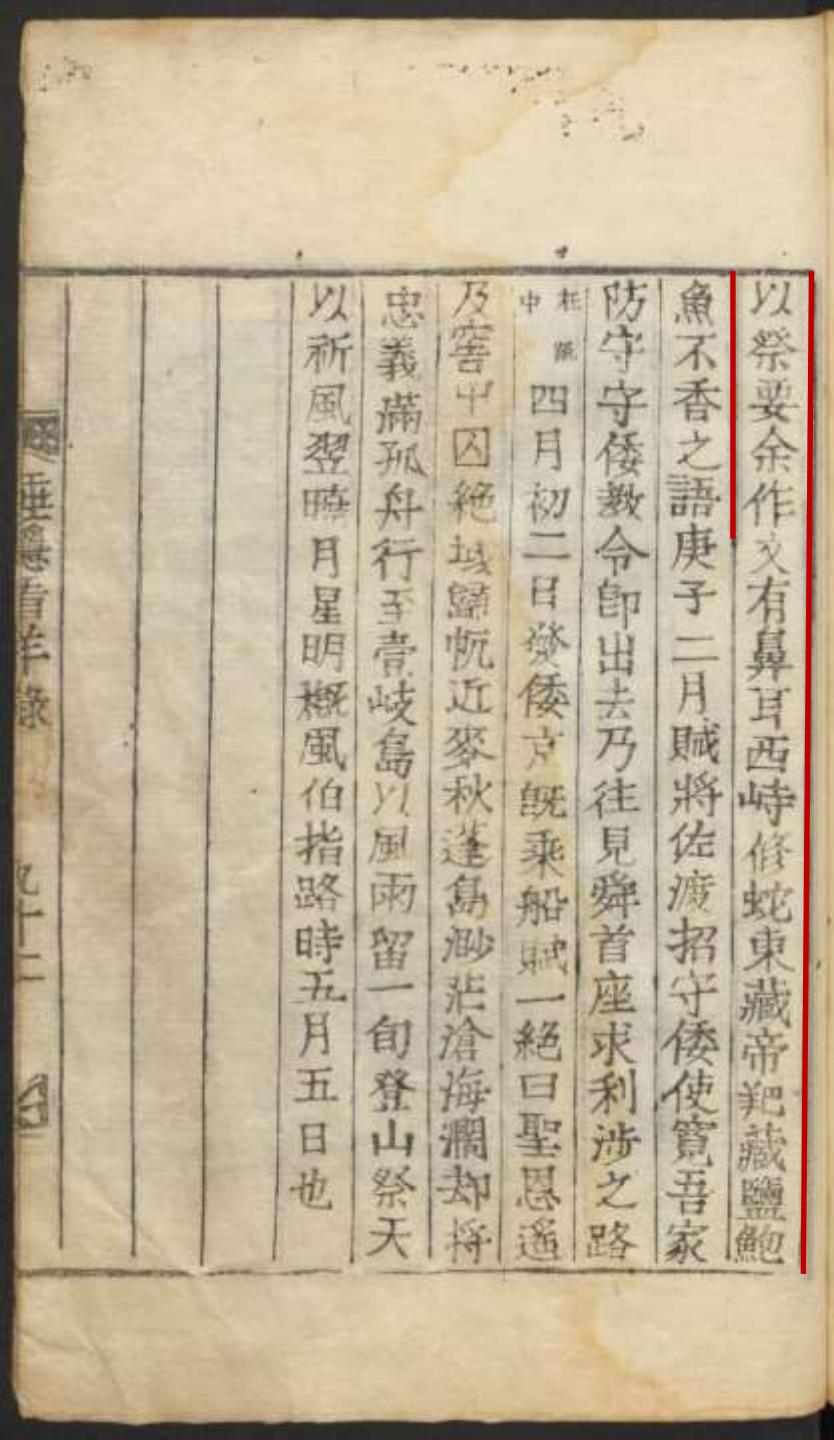
被虜人(拉致被害者)が見た耳塚

わが国人が米を集めて（耳塚を）祭ることになり、私に弔文を作るよう求めたので、こんな語を入れた。

鼻耳は西に峙（そばだ）ち
脩蛇＊は東に蔵（かく）る
帝羓は塩に蔵（かく）れ
鮑魚は香らず

姜沆「看羊録」（『睡隠集』所収）

＊「脩蛇」は大蛇。朴鐘鳴氏は「句全体の意味不詳」とする（東洋文庫訳注）



以祭要余作文有鼻耳西峙脩蛇東藏帝羓藏鹽鮑魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路

柱撫中

四月初二日發倭京既乘船賦一絶曰聖恩遥及窮中囚絶域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天以祈風翌曉月星明概風伯指路時五月五日也

姜沆の弔文にある「脩蛇」（大蛇）
とは誰を指すか？
①李舜臣 이순신
②豊臣秀吉
耳塚（鼻塚）

被虜人(拉致被害者)が見た耳塚

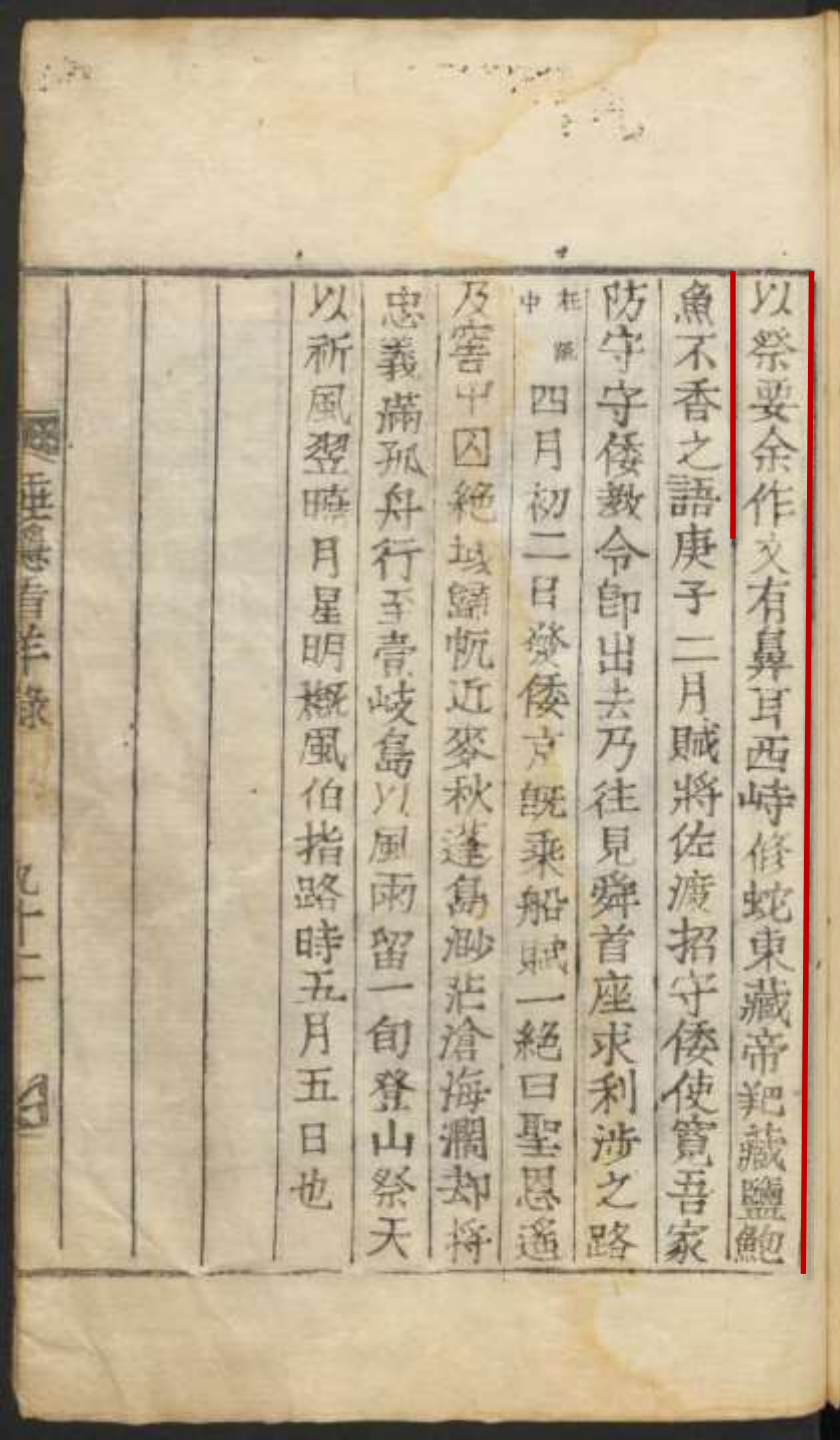
鼻耳は西に峙（そばだ）ち
脩蛇＊は東に蔵（かく）る
帝羓＊は塩に蔵（かく）れ
鮑魚＊は香らず

姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

＊「脩蛇」は東の阿弥陀ヶ峰に埋葬された秀吉を指す。

＊「帝羓」は遼の太宗の遺体が保存のため塩漬けにされたことを漢人が揶揄した言葉。

＊「鮑魚」は悪しく臭いものを指す。



以祭要余作文有鼻耳西峙脩蛇東藏帝羓藏鹽鮑魚不香之語庚子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家防守守倭教令即出去乃往見舜首座求利涉之路

柱藏中

四月初二日發倭京既乘船賦一絶曰聖恩遥及窘中囚絶域歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海濶却將忠義滿孤舟行至壹岐島以風雨留一旬登山祭天以祈風翌曉月星明概風伯指路時五月五日也

耳塚
秀吉が埋葬された
豊国廟跡

袁黄(了凡)＊『斬蛟記』梗概(一)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

関白平秀吉は日本人でも無く、中国人でも無い、蓋し妖怪変化の者である。

昔、旌陽許真君が蛟を斬った時、一匹の小蛟が有って其の腹から出た。小蛟は未だ別に犯せる罪が有るわけでも無かったからして、誅を加へず其まま江中に縦って大海に帰せしめた。すると其の小蛟は日本の紅鹿江なる銀蛟山に往って住んだ。

それから一千二百余年間、物類を害すること記し尽くせぬほどであったが、今や又化して人となった。其れが即ち平秀吉である。

＊袁黄(生没年不詳)は明末の思想家。秀吉の第一回朝鮮出兵の際、宋応昌の参謀として従軍した

＊旌陽許真君、許遜(二三九～三七四)、東晋の道士。

袁黄(了凡)＊『斬蛟記』梗概(一)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

秀吉は一兵卒より身を起し旧関白を殺して其位を奪ひ、智力を以て六十六洲を征服し、各洲の民は其の妖精なるに気付かず、但其の奸智に長けたるを見てひたすら之に畏服してゐた。

琉球や朝鮮も之に朝貢し敢て礼を失はなかったが、突然万暦二十年四月に至り、彼は二十余万の大軍を率ゐて朝鮮を犯し、対馬から釜山鎮に上陸した。鮮人は風を望んで逃遁した。

秀吉は王京に拠り、(小西)行長は平壌に拠り、(加藤)清正は安辺に拠り、沿道には皆兵を屯せしめて互に連絡を保ち、其意は実に遼東を犯し北京まで攻寄せんと欲するらしいのであった。

袁黄(了凡)＊『斬蛟記』梗概(一)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

秀吉は一兵卒より身を起し旧関白を殺して其位を奪ひ、智力を以て六十六洲を征服し、各洲の民は其の妖精なるに気付かず、但其の奸智に長けたるを見てひたすら之に畏服してゐた。

琉球や朝鮮も之に朝貢し敢て礼を失はなかったが、突然万暦二十年四月に至り、彼は二十余万の大軍を率ゐて朝鮮を犯し、対馬から釜山鎮に上陸した。鮮人は風を望んで逃遁した。

秀吉は王京に拠り、(小西)行長は平壌に拠り、(加藤)清正は安辺に拠り、沿道には皆兵を屯せしめて互に連絡を保ち、其意は実に遼東を犯し北京まで攻寄せんと欲するらしいのであった。

袁黄(了凡)＊『斬蛟記』梗概(一)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

祖師は矢庭に剣を揮うて一撃するよと見れば、其頭はころりと墜ち、其身は水面に浮んで来た。

長さ約数千丈、蛇形にして魚鱗あり。あたりは霧の如く白き一種異様の気が充塞して、咫尺（しせき）を辨ぜず。やや暫くして気は霧れ、祖師は徐茂公に命じて其首を取って之を埋めしめた。

是れ実に万暦二十一年正月七日の事であった。

『斬蛟記』はいつ書かれたのか？

『斬蛟記』は、豊臣秀吉の死を「万暦二一年（一五九三年）正月七日」としている。……秀吉が急死したのは、万暦二六年（一五九八年）八月十八日であり、……同年十一月には福建巡撫・金学曽が「関酋平秀吉、死す。内乱まさに起こらんとす」と報告しているから……この小説が書かれたのは、それ以前であることが証明できよう。

王勇『中日関係史考』（中央編訳出版社、一九九五年）

	作者	作品名	内容
明代	袁黄	斬蛟記	豊臣秀吉に化けた蛟(大蛇)を退治する話
	佚名	戚南塘剿平倭寇志伝	
	蕭応宮	朝鮮征倭紀略	
	銭塘西湖隠叟	胡少保平倭記	
	佚名	（戯曲）蓮嚢記	
清代	陳忱	水滸後伝	水滸伝の英雄・李俊がシャム王となり、倭の関白と戦う話
	青心才人	金雲翹伝	
		野叟曝言	倭寇の頭目・関白木秀とその妻を退治する話
	佚名	綺楼重夢	
	李石川	緑野仙踪	
	陳朗	雪月梅伝	
	夢花居士	蜃楼外史	
	佚名	十二蟾	
	佚名	四香縁	

秀吉の朝鮮出兵は、いまも東アジアの人々の間で苦難の歴史として記憶されている。

二〇一四年、韓国でこの戦いで活躍した将軍を描いた映画が大ヒットなった。その将軍とは？

①李舜臣 이순신

②安重根 안중근

？

韓国映画『명량(鳴梁)』＊

二〇一四年公開の『명량(鳴梁)』は、秀吉の朝鮮出兵の際、鳴梁での海戦で朝鮮水軍を勝利に導いた李舜臣(이순신)将軍の活躍を描いた映画。

韓国では観客動員数が史上最高の一七〇〇万人＊を突破する大ヒットとなった。

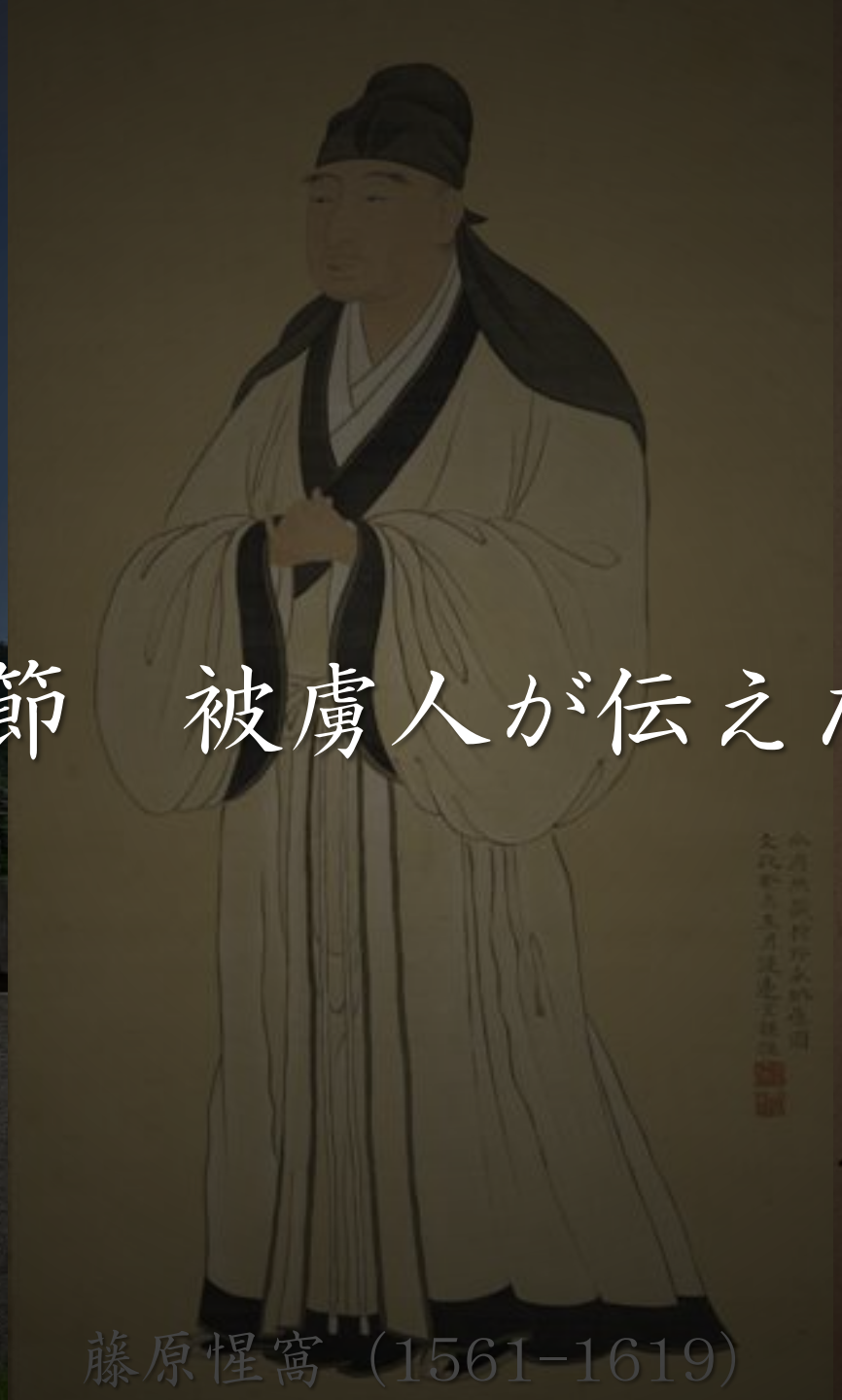
＊邦題「バトル・オーシャン 海上決戦」

＊韓国の総人口約五千万の三四％に当たる

韓国映画「鳴梁(バトル・オーシャン 海上決戦)」より

第三節　被虜人が伝えた文化

姜沆（1567-1618）



藤原惺窩（1561-1619）

林羅山（1583-1567）

姜沆と藤原惺窩

〔解説〕

姜沆（一五六七―一六一八）は、京都に幽閉されている間に、幾人かの日本の僧侶と親交を持つ。

その中に舜首座という漢文に通じた禅僧がいた。後年、近世儒学の祖と呼ばれることになる藤原惺窩（一五六一―一六一九）である。

内山書院（全羅南道霊光郡仏甲面）の姜沆像

内山書院（全羅南道霊光郡仏甲面）の姜沆像

姜沆と藤原惺窩

「私は、倭の都に連れてこられてからというもの、倭国の内情を知ろうと思い、時々倭僧と接した。その中に妙寿院の舜首座（藤原惺窩）という者がいた。（中略）

彼は大変聡明で、古文を理解し、書について通じていないものはない。」

姜沆『看羊録』賊中聞見録

藤原惺窩はもともとどのような身分の出身であったか？

①公家

②武士

Q

近世儒学の祖・藤原惺窩

（一五六一～一六一九）

〔解説〕

公家の家に生まれた藤原惺窩は、武士による力の支配を嫌い、中国や朝鮮に平和で秩序ある社会をもたらした儒教に深い関心を抱いていた。

姜沆との交流を通じて朝鮮の国教である朱子学に傾倒した惺窩は、やがて仏教を離れ、朱子学の研究と教育に専念し、近世儒学の祖となった。

Q

江戸時代、儒教の官学化に貢献した林羅山は、どのような身分の出身であったか？

① 町人

② 武士

藤原惺窩と林羅山（一五八三―一六五七）

〔解説〕

林羅山は京都の町人の出であったが、師である藤原惺窩の推挙により徳川幕府の顧問となり、武家諸法度の撰定や朝鮮通信使の接待など、政治や外交にその手腕を発揮した。

羅山は、さらに上野忍岡（しのぶがおか）に私塾や書庫、孔子廟を設け、儒教の官学化に貢献した。

姜沆（1567-1618）

藤原惺窩（1561-1619）

林羅山（1583-1567）

藤原惺窩と林羅山はなぜこのような衣装を身に着ているのか？

①惺窩はもと僧侶のため、その一門は僧衣を着る伝統があった

②惺窩や羅山は中国や朝鮮の儒教世界にあこがれていたため

藤原惺窩（1561-1619）

林羅山（1583-1567）

朱熹（1130-1200）

藤原惺窩（1561-1619）

林羅山（1583-1567）

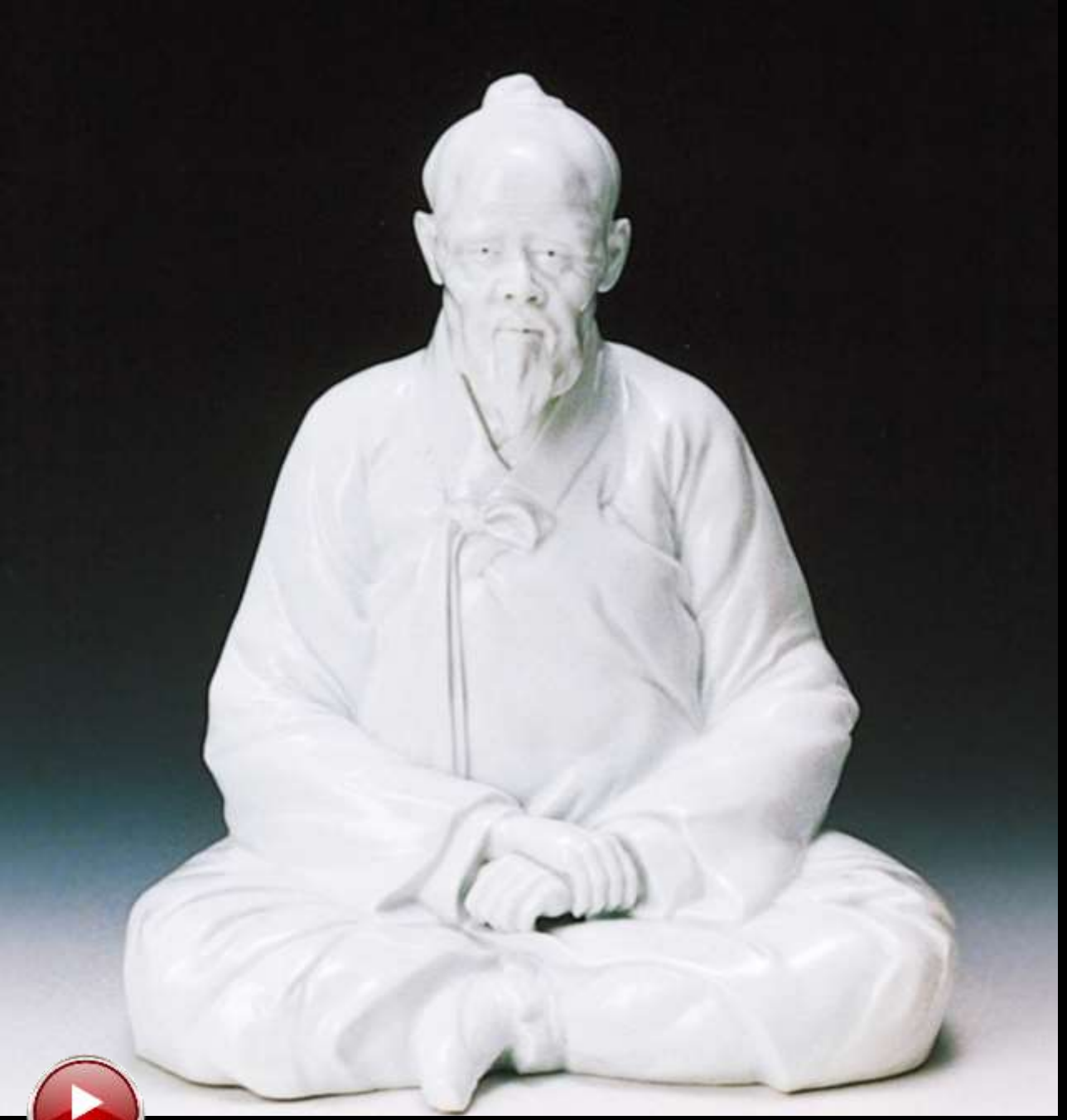
平和で秩序ある世界に憧れた惺窩

（藤原惺窩）はかつてこう言った。

「実に残念です。私は大唐に生まれることもできず、朝鮮に生を得ることもできず、日本のこのような時代に生まれるとは。

私は辛卯（一五九一年）三月、薩摩に下り、朝鮮に渡ろうと考えましたが、朝鮮出兵のために海を渡る望みは叶いませんでした。」

姜沆『看羊録』賊中聞見録



有田焼の祖・李参平（?-1655）

新たな文化を伝えた被虜人たち

〔解説〕

被虜人たちの中には、日本に新たな文化を伝えた人々もいた。

鍋島藩初代藩主鍋島直茂によって佐賀の地に連れてこられた李参平は、有田で良質の磁器鉱を発見し、それまで中国などからの輸入に頼っていた磁器の生産を始めた。

ＮＨＫ ＥＴＶ特集「日本と朝鮮の２０００年 第８集」より

秀吉の朝鮮出兵の再評価

〔解説〕

秀吉は没後、朝廷から神号を与えられ、豊国神社が建立されたが、その後、徳川幕府の意向により神号は剥奪され、神社も廃絶となった。

ところが明治時代になると、「皇威を海外に宣べ、数百年の後、猶も彼をして寒心せしむ。その国家に大勲功ある、今古に超越する」と再評価され、神社が再建された。

京都・豊国神社

方広寺
豊国神社
耳塚
VIDEO

「耳塚はいま」（鈴木ゼミ2014年度生制作）

史跡方広寺石塁および石塔（昭和44年4月12日指定）

「耳　塚（鼻　塚）」

この塚は、16世紀末、天下を統一した豊臣秀吉がさらに大陸にも支配の手をのばそうとして、朝鮮半島に侵攻したいわゆる文禄・慶長の役（朝鮮史では、壬辰・丁酉の倭乱、1592～1598年）にかかる遺跡である。

秀吉麾下の武将は、古来一般の戦功のしるしである首級のかわりに、朝鮮軍民男女の鼻や耳をそぎ、塩漬にして日本へ持ち帰った。それらは秀吉の命によりこの地に埋められ、供養の儀がもたれたという。これが伝えられる「耳塚（鼻塚）」のはじまりである。

「耳塚（鼻塚）」は、史跡「御土居」などとともに京都に現存する豊臣秀吉の遺構の一つであり、塚の上に建つ五輪の石塔は、その形状がすでに寛永2年（1643）の古絵図にみとめられ、塚の築成から程ないころの創建と想われる。

秀吉が惹き起こしたこの戦争は、朝鮮半島における人々の根強い抵抗によって敗退に終ったが、戦役が遺したこの「耳塚（鼻塚）」は、戦乱下に被った朝鮮民衆の受難を、歴史の遺訓として、いまに伝えている。

耳塚（鼻塚）の解説文

京　都　市

まとめ

一五九二年から九八年まで七年に及んだ秀吉の朝鮮出兵は、東アジアの人々の心に負の対日イメージを刻み込んだ。

一方、朝鮮の儒学者が伝えた朱子学は、日本に秩序ある太平の世をもたらし、陶工たちが伝えた製磁の技術は、日本に新たな産業を誕生させ、中国貿易への依存度を下げた。

日本との戦いで財政破綻した明が滅び、中国東北部の狩猟農耕民であった満州族が清を興すと、日本は中国との外交関係を回復せぬまま、蝦夷、朝鮮、琉球との間に独自の国際秩序を築いていった。

参考文献

- 仲尾宏『朝鮮通信使と壬辰倭乱』（明石書店、二〇〇〇年）
- 平川新『戦国日本と大航海時代』（中公新書、二〇一八年）
- 姜沆、朴鐘鳴訳注『看羊録―朝鮮儒者の日本抑留記』（東洋文庫四四〇、平凡社、一九八四年）
- 青木正兒「支那小説戯曲中の豊臣秀吉」（『青木正兒全集』所収）
- 孟森「袁了凡斬蛟記考」（上海商務印書館、一九一六年）
- 王勇「明清戯曲小説中的倭寇題材―明代短編伝奇《斬蛟記》評述」（『中日関係史考』中央編訳出版社、一九九五年）
- 鈴木健一『林羅山』（ミネルヴァ書房、二〇一二年）